

事項	津軽地域における転作大豆「おおすず」の晩播栽培では栽植密度を増やすことで収量が安定する												
ねらい	おおすずの播種適期は5月上旬から下旬、栽植密度は18～20本/m ² 、基肥窒素量は2～3kg/10a、追肥窒素量は開花期に5～8kg/10a施用することと指導されている。しかし、作付面積の増加や水稻の移植作業との競合により播種作業が遅れているのが現状である。そこで、津軽地域の転作田での晩播栽培におけるコンバイン収穫に適した栽植密度を明らかにしたので参考に供する。												
指導 参考 内容	<p>1 「おおすず」の6月第1半旬における栽培法 栽植密度は、29本/m²（うね幅70cm、株間5cm）とする。 施肥量は標準並みの基肥窒素量3kg/10a、追肥窒素量5～8kg/10a、追肥時期は開花期頃とする。 栽植密度を増加することで着莢位置が高まり、収穫率が向上することにより、収量が標準播種並となることが期待できる。</p> <table border="1" data-bbox="427 913 1273 1249"> <thead> <tr> <th>播種期</th> <th>栽植密度 (本/m²)</th> <th>基肥 窒素量 (kg/10a)</th> <th>追肥 窒素量 (kg/10a)</th> <th>収量比 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>6月第1半旬</td> <td>29</td> <td>3</td> <td>5～8</td> <td>98～101</td> </tr> </tbody> </table> <p>(注) 収量比は子葉節から高さ15cmまでの収量を除いたコンバイン収穫を想定した標準播種に対する割合。</p>			播種期	栽植密度 (本/m ²)	基肥 窒素量 (kg/10a)	追肥 窒素量 (kg/10a)	収量比 (%)	6月第1半旬	29	3	5～8	98～101
播種期	栽植密度 (本/m ²)	基肥 窒素量 (kg/10a)	追肥 窒素量 (kg/10a)	収量比 (%)									
6月第1半旬	29	3	5～8	98～101									
期待される効果	大規模大豆生産農家・集団において、播種作業が遅れる場合の収量安定化に寄与する。												
利用上の注意事項	本試験は、前年に稲わらすき込みの転作初年目で実施され、根粒菌の着生が劣るほ場である。												
担当部署 (担当者名)	青森県農林総合研究センター 水田利用部 (工藤忠之、西澤登志樹、松川佳澄)	対象地域	津軽地域										
発表文献等	平成16～18年度 青森県農林総合研究センター試験成績概要集												

【根拠となった主要な試験結果】

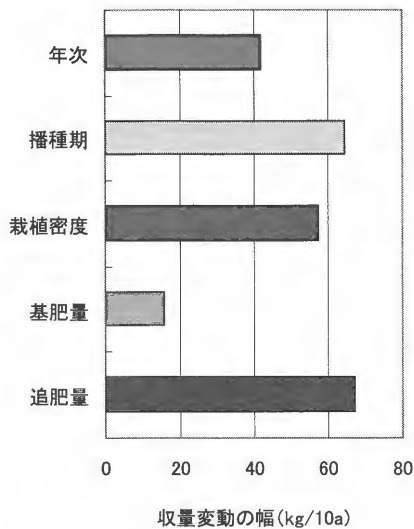


図1 栽培要因が収量に及ぼす影響 (n=38、数量化I類) (平成16~18年 青森農林総研)

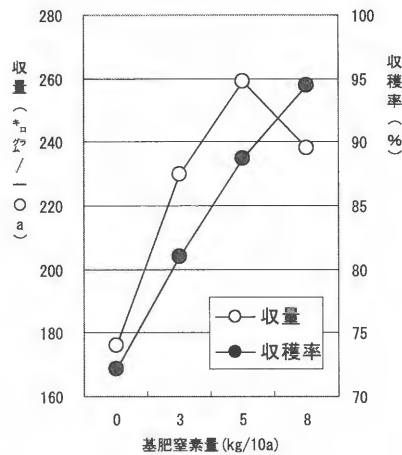


図2 基肥窒素量と収量及び収穫率 (平成18年 青森農林総研)

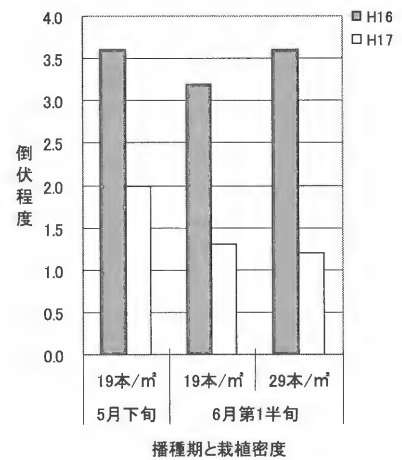


図3 播種期、栽植密度と倒伏程度 (平成16~17年 青森農林総研)

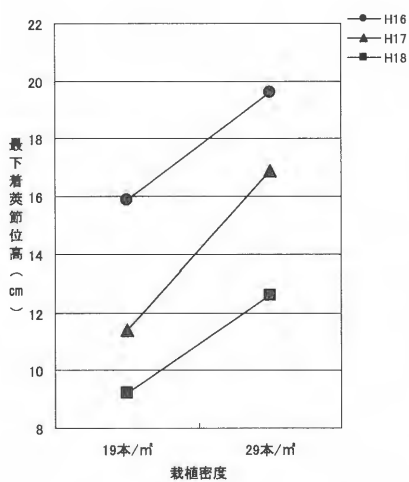


図4 栽植密度と最下着莢節位高 (平成16~18年 青森農林総研)
(注)6月第1半旬播種
基肥窒素量: 3kg/10a、追肥窒素量: 5kg/10a

表1 コンバイン収穫を想定した収量及び生育中の障害、成熟期 (平成16~18年 青森農林総研)

播種期	栽植密度 (本/m ²)	基肥窒素量 (kg/a)	追肥窒素量 (kg/a)	収量 (kg/10a)	収量比 (%)	収穫率 (%)	わい化病発生程度	成熟期	同左標準比
5月下旬 (標準)	19	3	5	341	100	83.8	微	10月15日	-
6月第1半旬	19	3	5	276	81	83.8	微	10月19日	+4日
		5	5	288	84	88.6	微	10月19日	+4日
		3	8	287	84	87.2	微	10月15日	0
		5	8	298	87	92.1	微	10月15日	0
	29	3	5	333	98	91.4	微	10月19日	+4日
		5	5	345	101	96.3	微	10月19日	+4日
		3	8	344	101	94.9	微	10月15日	0
		5	8	356	104	99.7	微	10月15日	0

(注) 数量化I類による値。
収量: 総収量×収穫率のコンバイン収穫を想定した計算値。
収穫率: 子葉節から上位高15cm以下を除いた収量/総収量。
わい化病発生程度は観察。